



TITLE:

隠岐の新名[勝]天然記念物

AUTHOR(S):

園山, 市太郎

CITATION:

園山, 市太郎. 隠岐の新名[勝]天然記念物. 地球 1935, 24(3): 198-207

ISSUE DATE:

1935-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184479>

RIGHT:

隱岐の新名勝天然記念物

園山市太郎

日本海中の樂園隱岐前後諸島が、岩石地質學

的に我國に於けるアルカリ岩域の特殊局部を爲すと共に、カルクアルカリ岩と共存して、夫れ夫れの關係や現出狀態に特記すべきもの數々あるは周知に屬する。そしてその間に名勝や天然記念物の特異性あるものが、近來續々と學界に認められるに至り、就中島後東北端の「白島」と島前の「國賀」とは、その雙壁であるといはれる。

斯くて調査が歩を進めるに隨ひ、從來隠れてゐた特殊の絶景や、意義の深い記念物が、明るみに出ることは、何れの方面から見ても同慶の次第である。特に左記の二ヶ處は、昨秋文部省の國府囑託が調査せられ、本年六月には同脇水博士が踏査せられて、何れも第一流のものと折紙

を附けられた新名勝天然記念物である。

その一、知夫赤壁

知夫赤壁といふは、島前知夫里島の西南端立ヶ崎から、同島の西海岸一帯の地域、即ち知夫郡知夫村の背面に當り、同郡浦郷村との間にある赤灘ノ瀬戸に臨む帶ヶ崎突角までの新命名であつて、延長實に三千百米斷層崖の光景である。從來同名の地域は、中間に「離レ」といひて、斷層地變の當時、文字通り離れた地塊があるからその處までを稱したのであるが、新に見直された新名勝地としては眞價の實在上分ち難いといふので、前記の通り擴張して命名されたのであつた。

試に地質學的要領を記載するならば之れが基

盤は第三紀鮮新統の淺海成層であつて、内海側の對岸黒木村字美田ミダの一部から、二枚貝や保存不充分的な潤葉樹の木葉化石を産出する。表題の地域でも猶同斷であらうと察すべき理由がある。そして玄武岩が之れを被覆し、特に同集塊熔岩や、同凝灰岩が發達して地形を構成する。然るに同じ岩漿溜から、殆同時に分體迸發したと思はれる粗面安山岩質玄武岩や、その凝灰岩もあり、互層して一部の地形を構成するに與るのである。之れを突破して熔岩流を爲し、或は數多く岩脈として



第一圖 隱岐知夫赤壁大觀

白粗面安山岩質玄武岩の凝灰層
黒粗面岩の脈 ×¹ 同熔岩流

現出したものがアルカリ粗面岩である。要は島前一帶が内海側に向つて急劇に沈降した當時、現在の焼火山ヤクサンの位置を中軸として、放射狀に龜裂を生じたことに由來し、既に周知であるけれども猶特記すべきことである。そして表題の地

域に於ては、後の粗面岩と共に微妙的關係を爲して、凝灰岩の互層は大に攪亂され、加之最後の一大斷層の爲め、第一圖の通り、奇抜な絶景を爲すのである。背景の赤平山（赤禿山）はペグマタイトで恰章魚の足のやうに分岐し、その間に緩な溪谷を夾み、大觀上特殊の熔岩臺地である。頂上に於ける標高は三二五米、島前一帯を一眸の下に聚めた絶景展望の中心である。

岩石は前記粗面安山岩質玄武岩で、立ヶ峯（標高一七五米）附近には好露出がある。概して一面に芝生を爲し、隱岐牧場の本場であり、晩春の頃野生のだいこんが、足を踏み入れる處もない程叢生して可憐の花を開き、自然の華毛氈を展開する。その間に山體を爲す岩石の分解によつて、色濃き赤褐色の特殊土壤を斑紋狀に露すは、又柔和的光景の配劑として得難き色彩美である。却説表題知夫赤壁の主體を爲す同岩質の凝灰岩は、當時爆發の前奏曲として出來たものであらう。そして粗面岩によつて貫通され、更

に前記高平山熔岩の爲め被覆されたのは、各處に於ける現出狀態を觀察して疑はぬのである。

第一圖の上半に見える通り、斜に袈裟懸をしたやうに現出するは、前記凝灰岩が、層面を斜にして外側に傾き、然かも斷層崖の直立と殆同様に、赤い磨れ肌を遺すは、實際驚異の外は無い。然るに下方には恰荒刻みに抉り取つた跡のやうに見える斷層崖も、その大部分は猶同斷の凝灰岩であるにもかゝらず、地層面の向きによつて、分解の度が異り、前者が非常に赤いのに對して、後者は特に黒味を呈するは理論上の外、鑑賞眼に對して、誠に快感を與へるものである。そして後者の黒い崖地の續きに、赤い帶狀の筋が長く走るは、所謂「龍宮乙姫の赤帶」で部分によつては數段を爲し、厚さは數糎から三・四十糎に達し、その長さは數千米に及ぶものがある。往々黑色凝灰岩層を斜に、或は蜿蜒蛇行して之れを貫通するやうに見えるは岩石の節理に沿ふて早く分解し、鐵分の酸化に

よつてこの外觀を呈する。又袈裟懸の赤色壁面に於て、上下の兩側に黄色の色どりが特に美しいのは、鐵明礬生成の結果である。猶同圖の上部に白く倒三角形を現すは、粗面岩岩脈の一端が見えるのであり、下方左側汀線上に、白砂の堆積かと感じられるは、同岩石の熔岩流である。斯くして斷層崖は、五十米、乃至百七十米許の標高を保つて、高く或は低く續くのである。絶壁が餘りに急なるが爲め、崖下に於て鑑賞する船の中からは、背景を滿喫するは不可能であるけれども、崖の上部や側面に於て、海岸性植物景觀がよく代表するは、豪壯の光景と相俟つて、名勝地たる名に背かぬ。

閑話休題此處に重ねて火山岩類の迸發史を検討するならば、斷層崖の下部に位する玄武岩質熔岩が、斷續的に迸發したことである。即ち粗面岩や、粗面安山岩質凝灰岩の間隙、節理等を潜行して迸發し、立ヶ峯その他其特異の突兀光景を形成したのを記載せずにゐられぬ。此處に

いふその他とは、赤壁の主要部を北に過ぎて、相並ぶ「懸脇」^{カケワキ}の懸崖である。共に赤平山の一例であるけれども、後期に迸發した玄武岩によつて一部を被覆され、熔岩が柱狀節理を爲した部分の殘骸に外ならぬのである。若し夫れ陸上から踏査するならば、現實に之れを認むるの外、突兀部から相當に隔つた柔和な場面の各處にも猶累々としてその佛を存するは、又以て當時の狀態を考察すべき資料といはねばならぬ。

粗面岩の岩脈には、規模の大小、外觀的形狀殊にその分岐乃至節理の狀態等に就て特記すべきもの數々ある中、特に「龍騰り」の名あるはその一である。之れが位置は、船で立ヶ峯の下方を過ぎ、懸脇の一侧に達する時、岩壁面に之れが下半が見える。幅は僅に一米内外であるからその他のものと紛れて見逃し易いのであるが、背面の傾斜地に於ては、芝生の間に斷續して露れ、蜿蜒と騰り上つた跡のやうに見えるから、その名に背かぬ岩脈である。上方に於ての幅は

芝生の爲め明瞭を缺くも、確に數米を下らぬもので、相當に大岩脈たるを失はぬのであるから之れが隠見するあるは、蓋岩脈自體の兩側面に近く、比較的堅緻なる部分の殘骸かと考察する。附近にはかゝる白脈の外に、玄武岩質の黒脈も

あり、特に分岐が多いのと蜿蜒曲ることの著しいのは、注意を惹かされる。更に大岩脈の然かも異彩として記載すべきは「昇龍岩」の名あるものである。第二圖で見える通り、中央部が縊れて且分岐し、頗畸形を呈するものであるが、幅の狭い部分は、約二米餘であるに、夫れから上下共大に膨れて、四米乃五米にも達する大規模のものである。そして特に奇異に見えるは、前段にも書いた通り、岩脈の内部に縦の節理があり、こ

圖 二 第

(岩龍昇)脈岩大の岩面粗・壁赤夫知岐隱

脈岩的次二同×

脈岩の岩面粗D.Tトツカ

見替域區底海線點



呈するものであるが、幅の狭い部分は、約二米餘であるに、夫れから上下共大に膨れて、四米乃五米にも達する大規模のものである。そして特に奇異に見えるは、前段にも書いた通り、岩脈の内部に縦の節理があり、こ

の處に更に小岩脈が數條相並ぶことである。筆者の考察によれば、大岩脈を爲す熔岩が畧凝結した後から、殘漿の珪酸分に富むものが、流れて充填したのであるから、二次的岩脈ともいふべきであらうか？。圖の下部に於て、特に海蝕の跡を見るは、下層が粗面安山岩質玄武岩の凝灰岩であるに對して、上層は一般玄武岩質の夫れであるから、相接する部に於て、特に分解が進み、就中下層には赤壁の特徵色彩美を現して、白色岩脈との對照上目立つて美しい。

第三の大岩脈は、帶ヶ崎附近にある。所在地の岩壁が漸く低いから、幅數米のこの岩脈は、白龍の横臥に譬へて、「臥龍岩」の命名がある程太くて短い。

「離レ」に近く二條の「深浦」^{フカウラ}と命名された入り込みがある。之れを陸上から溪の行き詰りに就て探求する時は、正に岩脈が海蝕を受けた結果であるを見る。他の一は岩脈に由來するの外、岩壁にある岩石の節理に海蝕が加つて、合作と

なつたものであらう。之れが溪谷の二側に於て、外海側斷層崖の向きに、平行する岩脈の一端を見るは面白いことである。

前記畸形大岩脈のある附近に直徑約四米、深さは三米許、海岸甌穴の大形且極めて完全なものがある。之れを「龍宮の井戸」といふに對して、附近にある稍小形のものを「龍宮の水甕」と稱し、共に事實上益發展性のある天然記念物である。

その他斷層崖の下には、斷層地變による沈降に伴ひ、生成した男池、女池等の底が分らぬといふ凹みがあり、又岩壁が海蝕を受け、洞窟内に残つた岩塊に「達磨岩」^{ダルマイワ}といふもあり、三軒に餘る舟行は時の移るを覺えぬ。

知夫赤壁は、斯の如くその實を具備してゐるから、國寶に準じて保護せられ、永久にその名實を併せて傳へるであらう。同村には別に南海岸の神島^{ウシジマ}や淺島^{ワカシマ}から、知夫灣の一部「渡津の森」^{ワタスノモリ}にかけて、地學上溺谷の光景として、又域内の

高地「宇苔臺」からの展望を名勝といはれて、指定と確定されてゐるから、この松島の柔和な絶景と、本項知夫赤壁の豪壯美とを併せ、好一對の妙境として所有する同村の爲め、祝福の意を表する。

その二、國賀海岸指定地の擴張地域

國賀海岸といふは、同郡黒木村から、同浦郷村に涉つて、島前西ノ島外海側の一大斷層崖である。景の特徴は相續く山々の絶頂をかけて之れを縦斷し、外海側の一半を、突き落した後の豪壯美である。之れが絶壁の最高部「魔天崖」では標高實に三百米の上に出るといふ。表題の地域に於ては、地勢が次第に緩和され、絶壁の高さも、約その半内外である。之れが區域は既に指定地の南端として定められた鯛崎から、南下約五百米三度崎までの間と假定し、昨秋以來の懸案であつたのを、新に擴張地域として認められることになつたのである。

鯛崎に於て、岩石の節理に由來する海蝕洞窟

と、粗面岩の岩脈による夫れとが、岩壁内に於て、直交的に出合ひ、生成した「明闇の窟」を潜り抜けて、本項の區域に入るのである。そこで舟行の後を顧ると、國賀海岸の中心「鬼ヶ城」、「魔天崖」等の恐怖の斷崖や、「通天橋」（天然石橋）外の「天上界」と命名された一廊のやうに、奇拔な光景は見られぬけれども、海蝕洞窟が型が畧同大で、恰砲眼狀に相並んで十數ヶ處もあるは、特記すべきである、第三圖參照。先きの「鬼ヶ城」に對して、此處に「龍宮城」の命名を得たのも故あることである。岩石は知夫赤壁や、國賀海岸一般と同様であり、粗面安山岩質玄武岩のものも互層し、例の赤帯はその數と量とを減ずるも、猶實在するを見る。そして之れが節理や、又粗面岩の岩脈も多いから、此處に母岩と相接する部分に於て分解し、海蝕の乗ずる處となつて、斯くも洞窟を形成したのである。中には岩脈の下部は、洞窟として缺け、天井から白龍の昇るが如くに見えて、一の溪谷に沒す

第三圖 隱岐國賀海岸斷崖層窟洞並列



るものもある。之れが溪谷の成因も、亦岩脈及その接觸部が浸蝕を受けた結果に外ならぬはいふを俟たぬ。

三度崎の一側には、三度川の河口を受け、山容は俄然平凡の地となるから、此部を劃して新に國賀海岸の最南終點とし、名勝及天然記念物の擴張地として、取扱を受ける筈である。

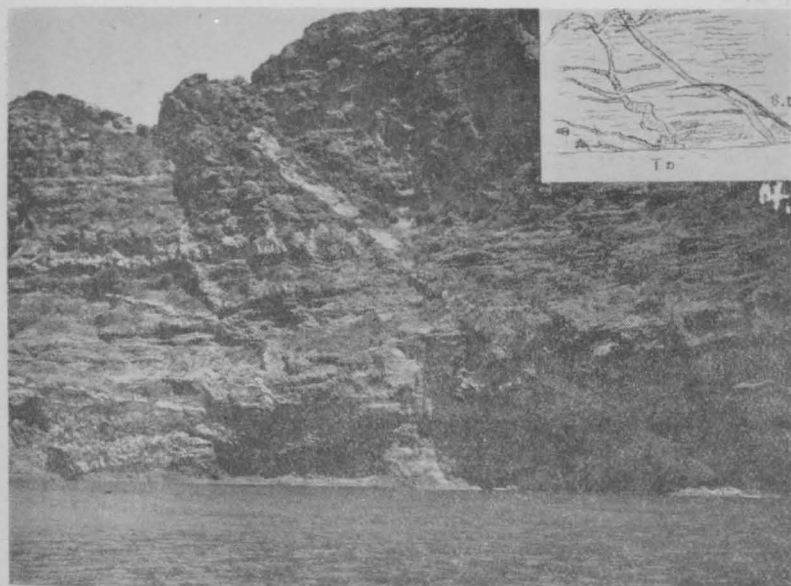
之れから南へ赤灘ノ瀬戸までは、その距離猶二軒を算し、再斷層崖の景域に入るのであつて、讚嘆に値するもの數々あるも、概して地勢の緩和が度を加へるから、豪壯的氣分の漸減するは、是非もないことである。然るに第四圖にて見る通り、局在的のものとはいへ、特級的岩脈が實在するは、蛇足ながら掲げずには居られぬ。

この岩脈には粗面岩の白質と、玄武岩質黒脈との二種があるから面白い。そして前者のその一は恰枝珊瑚のやうに分岐し、圖の中央

脈岩の地績接岸海賀岐隱 圖 四 第

脈岩の岩武玄 D.B

脈岩の岩面粗 D.T



地
球

第二十四卷

第三號

二六

四四

下部から上り、左右に發展したものである。同じく一の白脈は、圖の右隅から起り、殆枝を分つことなく、驀進して溪谷に没する。然るに後者即ち玄武岩の黒脈は、第四圖の下部右寄りの部から、概して平低に走り、白脈によつて切斷せられるものと、又反對に之れを横斷して後成を意味するもの、二つがある。然るにその根幹ともいふべき下部では、同一のやうに見え、一見不可解の感あるも、その一は粗面岩質の白脈に先んじて生成し、更に夫れより後期に於ても成立した爲めに白脈を横斷したのであらう。同一の根幹から分岐するやうに見えるは、後期の黒脈が岩壁に於ける元の古疵即ち先きに貫通した筋合に添ふて、流れ込んだ爲めのものであらうと信ずる。そして是等の岩脈中特に粗面岩のものは斷層後の分解により、母岩との接觸部が大に浸蝕されて岩脈部のみ斷續的に残り、浮き上つた

やうに見える。接觸面に對して柱狀節理の向きが型の通りであるから、實地に就て觀察する時は、層一層驚異の外は無い。この天然記念物は、國賀海岸を、此處まで延長して、或は單獨に保護したいは元よりのことながら、前記擴張部の南

端とも相當に距離があるのと、指定地の分布關係によつて、その實あるも公に指定の名を得られぬは、心なき岩脈に對して、同情の感なきを得ぬ。否學界の爲め遺憾に思ふの外は無い。(完)

(昭和一〇、七、一五稿)

江濃境上に於ける美濃の山村

―揖斐郡春日村字古屋に就いて―

秋 山 桓^{タケ} 士^オ

一、序

伊吹山に發源して本流揖斐川とオブセケントの流路を取りつゝ、粕川斷層線を北流する粕川は近江カルスト靈仙山近傍に發源して鈴鹿養老兩傾動地塊間の斷層角窪地をオブセケントに北流する揖斐川支流の牧田川とは相似形の姉妹溪谷

を爲して居る。

而して此の粕川の谿頭聚落が揖斐郡春日村字古屋であり、牧田川のそれが養老郡時村字時山である。此の姉妹谿谷に於ける二つの谿頭聚落は各々直線距離的には平野を距る事僅かに數料の地點ではあるが、重疊たる山岳に圍繞されて